

砂の堆積による水の出入りの減少

大量の砂の堆積

Fig.1～3は蒲生干潟の導流堤から同じ方向を撮影したものである。赤い丸は干潟中の同じ構造物を示している。7月の時点では大量の砂が堆積しているのがわかる。Fig.4は導流堤の水門付近であるが、完全に砂に埋まり水の出入りは不可能である。地震による地盤の沈下、導流堤の石の流出により導流堤が低くなったため、干潟と外部の水の出入りはむしろ多くなっていた(Fig.5)が、7月の時点ではFig.3の細い水路を通しての出入りのみである。

水の出入りの減少は、干潟内の生物に当然影響を与えられとされる。前回の調査では干潟内でクサフグ、イシガレイを採集できたが今回はボラの稚魚(10cm程度)が多数の他はマハゼ等が数匹採集できたのみであった。クサフグ、イシガレイは干潟と川をつなぐ水路の外側(Fig.4の黄色)で採集できた。

イシガレイは名取川河口域において7月上旬まで水深50cm以浅に棲息するというデータがある。したがってある程度成長し外海へ出るために移動した可能性、水質の悪化により移動した可能性の両方を考えることができる。

クサフグはこの日採集した平均体長が7.7cmであり生後満2年の若魚と考えられる。満1歳以上のものは4月中旬から夏・秋に湾内で普通に見られるとのデータがありこの時期に外海に出ることは無い。水の出入りが減少したことによる干潟内の水質の悪化、水温の上昇の影響により移動したことは十分考えられる。今後は夏の高温による水温の上昇も考えられ、生物にとって苛酷な環境になる可能性は否定できない。



Fig.1 導流堤4月13日



Fig.2 導流堤5月12日



Fig.3 導流堤7月9日



Fig.4 7月9日



Fig.5 5月12日

引用文献

大森迪夫・佐々木浩一・伊藤絹子・片山知史(2001)イシガレイ稚魚のイソジミ水管摂食と水管の再生、農林水産系生態秩序の解明と最適制御に関する研究

 JSTN20011779

座間 彰

万石浦に出現する魚類の生態学的研究 座間, 1998